東北漫歩（福島縣之卷）（二）

和泉生

須賀川町の牡丹園は、今を去る百七十年の明和三年、當時須賀川城下に居住せる伊藤祐倫なる者、商用にて浪花に出向の歸途、藥用にせんがため携へたる十二種の牡丹苗木を移植したのが起因である。明治初年、柳沼源太郎氏の祖父が讓受け、爾來三代に亙り培養に努めたる結果、今日東洋一の名聲を博するに到つた。牡丹の株數三千二百中二百年を越ゆる老樹もあり、周圍の蒼茂たる老木と相俟つて風趣幽雅を極め、開花期の五月中旬から下旬へかけての一見は千金に値しよう。

都をば霞と共に立ちしかど
秋風ぞ吹く白河の關

能因の古歌碑は、白河樂翁公の建立したものであるが、現在の白河町にはなく、東方六粁の古關村大字旗宿に在る。即ち上代の奥州街道にして、最も要害の地であつた。白河町は、北畠親房・顯家等と皇子義良親王を奉じて、忠を南朝に盡した結城宗廣の嫡男親朝の時、此の地に居城を築き、漸次人家の集成を見るに至つたのが起源である。其の後、蒲生・加藤・上杉諸氏の所領に屬し、寛永四年、丹羽長重、棚倉より移封せらるゝに及んで一大土木を興し、先ず城砦を築き、町形を整へ、或は水利を通じて灌漑に便し、或は馬市場を開きて產業の啓發を圖り、其の治績偉大なるものがあつた。明治二年八月白河縣を置かれたが、同四年二本松縣に、更に同五年福島縣に移され現在に及ぶ。

親朝の築きし小峰城は、戊辰の役に兵燹に罹り、殿閣櫓

樓悉く烏有に歸し、今は僅かに濠の一部と本丸の石壁を殘せるにすぎないが、其の輪廓は名城として、我が國城廓史上特異な存在であるといふ。南湖公園は元大沼と稱し、荒蕪せる潴水なりしを、寛政の末年、白河樂翁公命じて開鑿し、其の周圍に吉野の櫻、嵐山の楓を移植して四民の觀賞地となし、傍ら水利を圖りて稻田萬頃を興せるもので、實に我が國公園の鼻祖であらう。西北に鏡の山を負ひ、其の南面に共樂亭が設けられてゐる。又西には那須連山の起伏を遠望し、東南には近く關山を指適することが出來る。湖心の玉女島には辨財天が祀られ、一舟に棹して賽するも亦可なりである。

白河樂翁公と言つても、果して誰であらうと頸をかしげる人もあらうが、樂翁公とは、晩年隱居後の號であつて、覆面を剝げばこれなん松平越中守定信公である。

幼少にして英俊であつた公は、安永三年十七歳の時、將軍の嚴命によつて伊豫松山の松平家より白河の城主松平守邦公の養嗣子となり、家督を相續したのは天明三年の二十六歳である。此の年は未曾有の凶作で、諸國はあげて飢饉の惱みに苦しみ、白河藩に於てもこれが對策に沒頭し、直に儉約令を下して之が徹底を勵行するかたはら、藁餅其の他の新しい食物の製法を普及する等、日夜救濟の衝に當りて大いに好成績を治め、尙學問武藝を奬勵して名君の實を擧げた。

老中に任ぜられたのは天明七年六月十九日、三十歳の若冠であつた。此の時も、白河襲封の日と同樣の非常時局で、世は泰平に慣れ、上下共に輕佻浮薄となり、風俗頓に頽廢し、加ふるに田沼一家の專政により政紀弛緩し、財政紊亂の狀態であつたが、公は滅私奉公の大精神を以て一意弊政の改革に邁進し、物價の引下げ殊に米價の引下げ、稅の輕減、植林開墾、備荒貯蓄、綱紀肅正等の功績に依り幕府中興の大事を成就した。また公は、寛政三年には、白河藩に藩學立敎館を創建して、敬神尊王の敎育を鼓舞した。當時一般の學校は、何れも孔子を祭つてゐたにも拘らず、立敎館のみは孔子を祭らず、講堂の中央に天照大神宮を祭

り、次に家康公の遺訓、次に四書五經と共に松平家の先祖定綱公の勸學家訓を安置せる主意は、第一は國の事、第二は德川家の事、第三には松平家の事を考へ、又聖人の道を尙ぶべきことを命じてゐるのである。公が國體明徵の觀念を抱き、如何に皇室を尊崇してゐられたかは、天明八年正月に大火があつて皇居炎上するや、直に鳴物を停止し、謹愼の意を表はすと共に、嚴命を下して行在所を警衛させ、一方力を盡して御所造營の事に當つた。此の時は、旣述の通り幕府の財政窮迫に瀕してゐたが、公は費用を啻まず役人を督勵し、古制に則り、規模を大にし、往古の盛觀に復し奉つたことによつても明かである。

幕府の中心にあること前後七年、時に三十六歲であつた。其の後は專ら藩治に意を注ぎ、塗物所を設け、藥園を開き、陶業及硝子製法の改良、製紙・造酒・疊表製織の技術傳習、甘藷及煙草の植附或は須釜鐵山の開坑、甲子溫泉道路の改築、奧州街道に並木を補植する等各方面に亙つて施設する所があつた。文化九年の五十九歲、家督を嫡子定永公に讓り、後には眞に樂翁の號に相應しい風月を樂しみ、優遊十八年、七十二歲を以て卒去す。

右のあらましは、前白河町長內藤六三郎氏が、深谷賢太郎氏に囑して編輯した「宗廣公と樂翁公」の小册子より拔萃したものであるが、序に、結城宗廣・親光兩卿の誠忠を顯彰し、且鄕土人をして大義名文に感奮興起せしめる爲に建碑された「感忠銘」を載せることにしたい。碑は白河町より小二粁東に在り、所謂搦目山の自然石を利用して彫つた磨崖碑である。高さ約八米五、幅約二米八であつて、全國有數の巨碑である。

蔚然深秀、在二我白河東一者、結城氏墟也。我望レ之而有レ所レ感焉。天亨建武間、士氣衰苶、天下擾々、視レ利避就。獨宗廣・親光、忠烈凜々、憤發唱レ義、欲下率二天下一而與ち之。不幸弗レ克、以殞レ身。然猶東州士民、知レ戴二南朝之天一者、實亦其力也。一時忠烈、楠公之外無二能耦一焉。而今吾民鮮レ知二其爲一州人一。奚以興二千餘風一。內山重濃家二於墟下一。捐レ財爲二予勒レ銘、表而出レ之。

公嘉二斯擧一、題賜二三大字一。以刻二上方一。嗚呼二子之忠魂、數世後得二此偉標一焉。其必含二笑於地下一。吾輩亦與有レ榮也。銘曰、

峭乎此山。維石巉々。溪風蕭然。劍佩夜還。踪蹟不レ刊。輝二映千年一。民莫二自棄一、國能生レ賢。

文化四年秋九月　廣瀨典謹識　賀孝啓謹書

我々が旅行をしたり、或は讀書の折に發見する碑文の數は相當多いが、其の眞意を十分に捕へることは、決して容易ではない。感忠銘に記す所の結城父子の功績も、北畠氏の聲望に壓せられて、廣く知られてゐないから、野暮の樣だが、碑文の通釋をそのまゝ移してみよう。よく吟味されて、南北朝時代の逆臣を憎み、尊王精神の發揚を望みたい。

こんもりと茂つた山が、我が白河の東に在るのは結城氏の城址である。私は之を眺めて心に感ずる所がある。

後醍醐天皇の御代、天亨から建武にかけての頃、士氣が衰へはてゝ、天下は亂れに亂れ、人々は利のない所は避けて、利のある所に就き從つた。其の頃、結城宗廣卿と其の子親光卿との二人だけは非常に忠義の精神が强く、憤發して大義を唱へ、天下の人々を率ゐて大義に味方しようと思つた。不幸にして戰に負けて斃れた。併し東國の武士や人民が南朝の天皇を戴く事を知つてゐるのは、實にその力である。當時に於けるその忠烈は楠公以外には較べものがない程であつた。それに、現在我が地方の人々で、結城公父子が我が土地の人であることを知つてゐる者は少いのである。

こんな風では、どうして結城公の殘された德風を盛にすることが出來ようか。內山重濃は城址の下に住んでゐて、この點に思を致し、私財を投じて、私に銘を作らせ、結城公の偉勳を世に表した。

松平樂翁公は此の企をお喜びになつて、題字として感忠銘と言ふ三大字を賜はつた。そこで之を上方に刻んだのである。

嗚呼宗廣卿・親充卿二人の忠義な魂は、數世の後にこの偉標を得たわけである。きつと地下にあつて、微笑んで居

られるであらう。私も亦與つて名譽である。

銘、嶮しく聳えてゐるこの山は、岩が高く突き立つてゐて、恰も結城公の偉勳を偲ばせるやうである。溪流には風が靜かに吹いて、劍や帶玉の觸れ合ふ樣な音がする。ちやうど結城公の精靈がこの遺跡に夜還つて來るかと思はれる。此の遺跡は、いまだに滅びないで、千年も永い間世に光り輝いてゐる。

我々の祖先には、こんな偉人を出したのである。この地方の人々が己の鄕土を忘れ棄てる事がなかつたなら、今後もこの土地から多くの賢人を出すであらう。

福島縣は、土木大縣だけあつて、國府縣道の總延長は東北六縣中第一位であり、從つて、之に要する經費も亦五縣の追從を許さぬ。昭和十四年度豫算議決額は、三十六萬八千三百九十五圓であつて、全國を通じて第七位であることは、東北地方の爲に氣を吐くものとして心强い。また、毎年度十萬圓程度の縣單獨道路豫算を計上してゐるあたり、國庫補助工事のみを生命の綱と賴む、岩手・靑森・秋田及

山形の各縣には、一寸眞似の出來ない藝當であらう。然し、東北振興府縣道改良事業費は、昭和十一・十二年度に於ては七十五萬圓、同十三年度に於ては五十八萬八千圓であつたが、同十四年度に於ては二十九萬五千圓の凋落である。これには、縣當局もさぞ呆氣にとられ、大世帶の遣繰りに、頭痛鉢卷であつたらう。福島縣が、僅か二十九萬五千圓とあつては、些か赤面ものだ。來年度は、決して此の轍を踏まぬ樣今から心し、其の貫錄の回復に突進すべきだと思ふ。

豪放磊落を以て鳴つた前長官君島淸吉氏は、稀に見る敬神家であり、溫情家であつた。特に下情に通じた名君振りは話題の華である。土木に造詣深く、土木長官としては、全國屈指の花形の一人として活躍され、福島縣の振興發展に偉大なる足跡を印されたのであるが、去る九月五日、新潟縣に榮轉されたことは、東北地方のリーダーを失つた寂漠と哀愁が胸を打つ。新長官橋本淸吉氏は、警察畑の傑物として、內務省或は警視廳に於ける辣腕は喋々するまでもな

いが、土木に關しては恐らく素人であらう。前長官の跡目を相續して、如何に花も實もある土木行政を敢行し確保するかゞ、新人に注がれる期待の全部であり、神がけて其の成功を祈るものである。

熊本縣土木部長に榮轉した河合清氏は、地味であつたが、確實性のある人であつた。三年七箇月を默々と働いて部長組に列した一人である。趣味は、將棋と圍碁とである。將棋は、老巧土居八段の門を叩いたといふだけあつて、緣臺將棋とはちと筋が違ふ樣に見える。俗に、理詰めといふ將棋であらう。私も、下手の横好きの譬に叛かず、大の將棋黨なので、福島縣に旅行すると必ず、河合氏に挑戰することを忘れなかつた。然し、其の堅實味と長考に苛々してか、飯坂で負け、東山でも敗れたが、昨夏、福島市での對戰には、初めから褌を緊めてかゝり、二勝一敗の勝越しとなつた。其の暮の上京には、近藤欣一氏と三人でリーグ戰をやつた。非常な熱戰であつたが、何れも一勝一敗の成績で、遂に榮冠涙なしで幕を閉じた。あれから、もう一年に垂んとしてゐる。物別れとなつたリーグ戰には、果して誰が優勝する？　皆さんの想像にお任せしよう。

將棋のきつかけで思ひ出したが、大衆文壇の蹠將として、其の速筆を鳴らした直木三十五氏は、將棋は段に二枚と、自らの技倆を承認してゐたやうだ。將棋は何よりも好きであつたらしく、愛人とのランデーウや、原稿の締切くらゐ少しの脅威に値せぬと嘯いてゐた。夜襲、奇襲を擅にし、文壇のヘボ連を苛めて、相當樂んでゐたらしい。一つ直木氏の棋術行脚帳を開いてみよう。

廣津和郎

廣津は中飛車で、手數七八十、中押しで破れてしまつた。次も亦中押し、香一枚ちがふかも知れぬ。

尾崎士郎

此の人は、廣津に角一枚弱いと云ふから、物の數ではない。

久米正雄

平手久米の先番、僕が慣れない石田に組んだのが捌けぬ

基になつて、初盤に桂損をし、中盤飛車損になつて破れたが、次の一戰、僕の先番は相懸りで、久米の負け、兩雄兩虎傷つかず。

佐々木茂索

酒のせいで、平手番ふらふらと、又石田に構へた。終盤一手々々といふ所になつて、茂索の下した桂が自分の飛車を自分で止める形になつて指切つてしまひ、物の見事に僕の勝となつた。次は香落番である。常から逆立つてゐる髪を逆立て、必死であるが、僕にしてみると、菊地の次に位する茂索を、平手で破れば、この一番は花を持たせてもいいし、張り詰めてゐた氣が弛むと、酒の醉は出て來るし、それでも、中盤まで美事に戰つたが、負けてしまつた。

×　×

茂索の家へ行くと、「將棋大講議」といふのがあつた。もう少しやらうかといふので、戰つたが皆負けた。これは僕が惡いのではない。ふさ子女史が、覗いてゐて、僕の形勢がよくなると、直木さん丁髷を結つたらよく似合ふでせうといふので、えゝ、さうですよ、と、誰かもそんなことを言つたと考へてゐると、何時の間にか形勢逆轉してゐるのである。夫婦馴れ合ひの將棋にかかつては敵はない。

吉川英治

定跡のうろ覺え、角を更へて飛車、金當りにならうといふ手を平氣で構へて、「負けたら君、吉川は徹夜してゐた夜でと書いて呉れ」と。所詮、敵はぬ所と、平手の先番、兜を脱ぎつつ口惜しがつて來たが、三番とも王手無しに、英治慘敗。

十一谷義三郎

僕に角一枚といふ下手さだ。

三上於菟吉

女で將棋の嗜のあるのは、佐々木ふさと、長谷川時雨である。ふさ女史のは茂索が強いから夫唱婦隨（但將棋だけと知るべし）であるが、時雨女史のは、三上が、から

つ下手であるから、餘程心掛けがいい。尤も、三上と平手で、その三上は、僕とは金二枚で負けるといふ一人前の男なら氣恥かしくつて指せぬといふ技量である。

鈴木氏亨

文藝春秋社の支配人で、菊地仕込の猛者である。平手、僕の先、鈴木の角切りが、終りまで祟つて中押しの負け、二番目、手を變へて四間飛車で向つたが、慣れぬ手といふものは指さぬもので僕の敗。終盤相懸り「木見八段得意の駒繰り」と銀冠りの陣を立てて、鈴木、飛角を捨てる破目となり、左右から挾撃されて慘敗。三上、側から「直木も時々いい手を指すね」と、何を、いい手と、惡い手とが八枚落に判るものか、「今日の直木は出來がいいよ」と三上め、いつも、僕を鈴木より弱いと見てゐる。

泉鏡花

泉先生のは、俗にいふぶら銀、王の左右へ銀が上り、桂の左右に金が構へて、飛角だけが動く外、一切手を束ねて敵を待つてゐると言ふ、蟻地獄戰法これ一つ限り、外に何も御存じない。だから、ぶら銀破りを一つ覺えて行けば百戰百勝で、これを知つてゐては試合に行けない。

里見弴

麻雀に熱中して以來、將棋が弱くなつて、僕と角一枚ちがふ。

和氣清三郎

萩原（淳八段）にいはせると、和氣は平手將棋の研究は仲々手に入つたものだそうであるが、言に違はず、平手番は二番とも僕が負け、石田と四間飛車とで僕が勝つた。和氣大いに口惜しがつて、萩原に四間を學び、銀が七八にゐたら引角、銀が六七に立つたら角は三三と覺えて、今度やつたらといつてゐたが、大抵これが阿呆の一つ覺えで、運用する迄は容易な話ではない。

霜田央光

互先で、二番とも中押し勝。央光、口惜しがつて三番目を勝つたが、これは夫人の手前、紳士としての僕の禮で

ある。

近藤經一

近頃めつきり上達して、角落で易々やつつけたのを、今日の如き、角落番中押し近くで負け、香落は流石に、玉頭に成歩をつけて、終盤まで一手ちがひであつたが、これも破れた。夜遊びをよして、將棋に凝つてゐる奴なんかに敵はない。

江戸川亂歩

電話をかけたら、いや、とても、いや、その君、困るよ人前で指せない將棋でねと、聲が變つてくるから餘程拙いに違ひ無い。將棋は探偵術の推理方法では駄目なのだらう。

金子洋文

菊地寛・野口雨情についで、佐々木茂索か、彼かといはれる上手である。金子には香落で一勝二敗、香落はむつかしいから却つて平手の方がいゝ、世間體がいゝし、成績だつて香落と同じに行けるだらう。

川口松太郎・岸田國士・池谷信三郎・武者小路實篤・山本有三・中村吉藏

角一枚弱い。角一枚は四段だから、菊地を文壇名人とすると、この連中は二枚落以下で素人初段といふ所である。

幸田露伴・馬場孤蝶

露伴氏の四段は別として、孤蝶氏の技倆は解らない。話がとんでもない方向に變換してしまつたが、これで、文士連の腕前も大體見當がつくだらう。このことは、中央公論社版の直木三十五隨筆集には、實に面白く書いてあるが、此處では、これ位に止めて置く方が宜しからう。然し、此の戰跡は、直木氏が大衆文壇陣を掻き廻してゐた頃のものであるから、今日では大分古い天狗日記になつてしまつた。私と直木氏との關係？　そんなことは、どうでもいいぢやありませんか。

千葉縣土木課長から新設部長にジャムプした後藤季總氏は、元氣潑溂の九州男子だ。一見御曹司と言つた優型であ

るが、仲々の荒武者として定評があり、五月蠅い童子の口から、ヤカマシ家とか、オコリン坊とかの勇名を度々耳にするが、的中してゐないと思ふ。兎角職務に忠實である熱心家は、あらぬ誤解を受け易く、從つて敵もあれば味方もあるのは當然の現象であらう。千萬人と雖も我行かんの氣魄を阻止する障碍は、斷々乎として一蹴し、不動の眞念を目指して邁進することは、天地に恥づるものではないが、若し部下に對する親愛を缺くとせば、自づと彼等を萎縮せしめることゝなる。起ち上らんとする者には、延々とした心で明朗に働かせることが肝要だ。「大樹之下無二美草一」の弊は避くべきであるが、百戰錬磨の後藤氏には、こんな道理は百も承知二百も合點のことだらう。幾多轉戰の殊勳に依り、愈々大部隊長としての最高位を獲得した後藤氏が、今後より鮮かに裁くであらう禪杖指揮の妙を瞠目することゝしよう。

土木部新設以來、久しく空席だつた道路課長の椅子も、三重縣より成田謙治氏が榮轉して漸く陣容を整へた。三重縣時代に於ける成田氏の好評は、須く衆人の頷く所であるが、雪國の福島縣はちと勝手が狂ふかも知れぬ。もう一技師ではない。堂々たる課長としての手腕を、まだ〳〵爲すべき縣下の重要幹線に揮ふべきである。

福島縣の外交に、此の人ありの監理課長丹野正人氏は、最近事務的手腕もめき〳〵上り、部内の信頼と與望を擔ひつゝあるが、其の陰に、監理課主席として奮闘する土木主事國分豐藏氏の存在を無視する譯にはゆかぬ。國分氏は、よく丹野氏を援けて今日に至つた。その溫情と柔和は聖人の稱さへある。車は兩輪の完きを得て圓滑に廻轉する。兩人の一層固きコンビこそ、餘力ある土木福島縣の躍進と向上の尊き原動力とならうことを確信して已まない。（完）

滿山紅葉して麓の霧深し
から松も紅葉もぬれて大日峽

（巴　藤）